

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

番外編

Fairy tale

峯村 明



リ・コンストラクション

登場人物

番外編・Fairy tale

-せっかくだから、半分くださない？-

-泊めてあげるといったけど、ウソだ-

-女の子が銀行の前でへたり込んでるのはちょっと...-

-きみが知らない事情は山ほどあるだろうさ-

-ディミトリエがこっち見てる-

-貴女は魔法にかかってしまったんです-

あとがき

奥付

登場人物

ソフィア	パリの音楽学校に留学中の少女
マリアンナ	ソフィアの同居人
コウイチ	外国人旅行者
ディミトリエ	ソフィアに思いを寄せる貴族
エディ	ソフィアの甥

番外編・Fairy tale

-せっかくだから、半分くださらない？-

01.

タぐれ時のパリの街を少女が歩いている。
波打つ黒い髪、エメラルドのような高貴な緑の瞳、バラ色のくちびるが少女の美貌を彩っている。
笑えばこの上なく愛らしいのに、彼女の表情は冴えない。音楽学校の授業を終えてアパートマン
に帰ってみると、手紙が届いていた。いつとき、心が踊る。(エディかしら？)

はずれた。(ディミトリエさま.....)

子爵家の三男坊で明朗快活、話題は豊富、ヨットを二隻持っていて、ゴルフはプロ並みの腕前
である。残念なことがひとつ、彼女より身長が五センチほど低い。身長が問題じゃないのよ、とは思
う。留学先まで手紙をくれるほど私のことを気づかってくれる。優しい男性じゃないの。お金持
ちだし。休暇がとれるから次の週末にパリで会おう、すてきなレストランに招待しますよという知ら
せだった。彼は南フランスに別荘をもっている。つまり、今はフランス国内、パリとは目と鼻の先に
いらっしゃるというわけで。

ため息が出てしまう。あまり熱心にアプローチしていらっしゃるのが息苦しい、なんて、言えな
い。

パリへ来た目的はふたつ。ひとつはお勉強の息抜き。もうひとつは、ほかでもない、熱心なディミ
トリエ子爵から離れていたかったから。

なのに。これじゃあ、意味ないじゃない、ちょっと放っておいてくれないものかしら。ねえ、マリアン
ナ、あたしって、まちがっている？

マリアンナはくにからついてきた娘で、同じ歳の幼馴染、ソフィアの家庭教師クリスマン夫人の
遠縁。留学を兄に相談したところ、若い娘がとんでもない！ という話になって、同性同年の監視
役を同伴することでどうにかこうにかパリ行が実現したのだった。

兄といっても親子ほども歳が離れている。

きゅうくつなのはもう、いたしかたないのだった。マリアンナにしてみればおこぼれ的に花の都までお供できて、ちゃっかりパリの暮らしを楽しんでいた。まあ、責任感からはほど遠かったのであった。

02.

監視役とはいえマリアンナは気楽な相手で、日常の楽しいお話相手としては十分だったけれども、込み入った相談事には向いていないと、ソフィアは以前から思っていた。

今日も学校を別々に出て、さて、彼女はどこに寄り道していることやら。

ディミトリエからの手紙は見なかったことにしよう、そうしようとソフィアは心に決めた。こちらから返事をしなければ、諦めるだろう。

ため息をついて、ベッドに身を投げる。マリアンナは帰って来ないし、晩ごはんをどうしようかしら。

しまり屋のソフィアは自炊派である。実家がお金持ちでお小遣いには困らないマリアンナは外食をしたがる。

(ふう)

しばらく天井を眺めて、起き上がり、冷蔵庫を開けてみると……たまごくらいしかない。そうだ、今週のお買い物はマリアンナの担当だったんだった。

お買い物はマリアンナがしてくるかもしれない。それとも、自分だけ……気の合うお友達と……どこかで食べてくるかもしれない。

かんがえているとむしゃくしゃしてきた。

どうしてわたしがこんなことで悩まなくちゃならないのよ。マリアンナはお気楽すぎるわ、勝手だわ、少しはわたしに気を遣うべきよ！

腹を立てたら盛大におなかが鳴った。それで出かける気になった。

そうだ、屋台でガレットを買っちゃおう。

03.

チーズとハムのガレットを片手で口に運びながら、もう片手は膝の上のスケッチブックにせっせとなにか描きこんでいる。と、人の視線に気がついた。

視線の来る方に目をやると、若い男だ。立ったままじっとソフィアを見ていたらしい。よくあることだった。

ソフィアは美少女だから、人の目をよく集める。だからあまり気にしない。

すると男は声をかけてきたではないか。「おいしそうに食べるねえ」、と。

「おいしいのよ」、と返す。

「どこで売ってる？」

「そこ」鉛筆をもったままの手の親指で背後を指す。

「おおう」

男は屋台で店番のおじさんに話しかけている。「あの娘(こ)が食べてるのは何？ ハムとチーズ？ じゃ、それを」

男はソフィアの傍に戻ってきてベンチのとなりに腰かけた。腰かける前からガレットを口にいていた。「ほんとだ、うまい」

ソフィアは横目で見ながら言った。「旅行者？」

「——どうしてわかる？」

「フランス語の発音がへん」

「あはは！ むずかしいよフランス語は！ ドイツ語は得意なんだけど！」

「ドイツ人？」

「半分ね。もう半分は日本人」

「ふうん」

「だからフランス語ヘタなのは勘弁して。きみ、絵、上手だね、画学生？」

「いいえ。音楽学校通ってるの」

「へええ。あ、これ、半分こしない？ ぼくまだ飲んでないから先にどうぞ」

「ディアボロマント¹？ すっごい緑色！ からだに悪そう」

「まあそういわないで。パリではこれがお勧めだって聞いたからさ。でも毎日飲んだらからだに悪いかも。じゃあぼくが全部飲もう」

「あ、せっかくだから、半分くださらない？」

¹ ディアボロはレモネード マントはミント

どうかしてるわ、とソフィアは思った。音楽学校は女の子ばかりのクラスで男の子はいない。ふだん、男子と話をする機会はない。だというのに、この初対面の若い男とはおかしなくらい話が弾んだ。なにも考えずにすらすらと言葉がでてくるのである。

しまいには、ソフィアは男の似顔絵を描いて渡してやった。ついでにセーヌ川に向かって佇む後姿をハガキにスケッチした。タイトルは適当に、『セーヌ河畔の青年』にし、通りすがりのポストに投げ込んだ。

- 泊めてあげるといったけど、ウソだ-

04.

互いに名も知らずに、ソフィアはアパルトマンの近くで男と別れた。路地から車が出てくる。
(あら。あの車たしか、ディミトリエさまの……?)

まさかね、とソフィアは思う。ディミトリエからの手紙は今日ついたばかり。次の週末に会いましょうとか書いてなかったっけ?

釈然としないまま、アパルトマンの自分の部屋へ戻る。まっくらだ。マリアンナはまだ帰ってきていないようだ。

灯りのスイッチを押して、室内を見回す。

なんだか、出かけた時と、様子が違うような気がする。自分の机のうえに置きっぱなしにしていた手紙、ディミトリエからの手紙の位置が、変わっている?

室内の様子が違うように感じるのは、自分のいない間にマリアンナが帰って来たからではないだろうか。そしてディミトリエからの手紙を見た?

(べつに手紙見たっていいけど)

べつにいいんだけど。さっき外で見た車はやはりディミトリエさま? もしかして、車にはマリアンナが?

あれもこれも、憶測でしかない。

けれど、なぜかぞわっと鳥肌が立った。

居てもたってもいられなくなって、部屋を飛び出し、アパートマンを飛び出した。

とたんに、そこにいた男と鉢合わせした。「おおっと！」「あっ！？」

さっきの男ではないか。こんなところで何をしているのか。

「なにしてるって、ほら、この帽子、きみのだろ？ ベンチに置き忘れてたんで」

05.

「怖くて部屋に戻れない？」

男は頭をかきながら困った顔をした。会ったばかりの、見ず知らずの、どこの誰だかわからない女の子に、いきなりそんなこと言われても、と顔に書いてある。

「そうですね……ごめんなさい、わたし、どうかしてるわ……」

ソフィアはしゅんとしてしまった。見ず知らずの旅行者にそんなことを訴えて、どうするつもり？と自問する。暮れなずむ空を見上げると三階にある自分の部屋の窓が目に入った。思わず、「あっ」と声が漏れた。

「どうしたの」

「部屋に灯りがついてる——あれ？ ドアを閉めるときに消したはず——」

ソフィアの視線の先を男も目で追う。「誰か部屋にいるみたいだけど。ほら、人影が」

慌ててはいたけど、鍵はかけた。震える手でかけたからしっかり覚えている。じゃあ、マリアンナが帰ってきた？ いいえ、階段はひとつしかない。駆け下りた時、誰にも会わなかった。エレベーターなんてないから行き違いということはある得ない。

「同居人はマリアンナというんだね。もしかしたら、別の部屋にいたのかもしれない、ということはある？」

別の部屋？ 隣の部屋に同じ音楽学校の生徒が住んでいるが、二、三日まえに急な用で帰郷すると言って出かけて行った。他の階の住人はそれほど親しくない。マリアンナはどうか知らないけど。

あれこれ考えていると、ふっと、部屋の灯りが消えた。

ソフィアと男は顔を見合わせ、申し合わせたようにアパートマンの向かいの、雑貨店の店先に走った。そこからアパートマンの出入口がよく見える。

ふたりはしばらくの間……雑貨店が店じまいするまでの二時間くらい……様子をうかがっていると、ひとり帰宅し、もうひとり帰宅し、出てくる者は、いなかった。

「一階は管理人さんが住んでるでしょ、二階に二部屋、三階に二部屋、それで全部よ」

その三階の一部屋の住人はソフィアとマリアンナで、もう一部屋の住人は帰郷中なのだ。それとも、さっきの部屋の灯りは管理人さん？ けど、管理人が留守宅に入ったり、する？

ソフィアはぶるっと震えた。日が落ちて気温も下がってきている。

「きみ、友だちは？」

いなくはないけど、パリへ来て二週間、それほど親しい友だちはいない。

「しょうがないなあ」、と男は言った。「ぼくの部屋へ来なよ。一晩くらい、泊めてあげる」

「え——でも——」

「一晩中、ここに立ってるつもり？」

06.

アパートマンと音楽学校は歩いて通える距離だったので、地下鉄は初体験のソフィアだった。切符売り場できょろきょろし、改札できょろきょろし、きょろきょろしているうちはよかったが、安ホテルを前にして呆然とした。アパートマンにいた方が安全だったかもしれないと思い始めていた。

男は……コウイチという名前だった……ホテルの前で立ち止まって、いきなり言った。

「泊めてあげるといったけど、ウソだ」

「え——」

「ひと部屋とってやるよ。空いてれば、だけど」

「え——ちょっと待って！ それは——いや！」

「それは——いやって、あのねえ」

「お願いします、ひとりにしないで！ ひとりはいやなの！ 一人はこわいのよ！」

「わ、わかりましたよ……」

そして部屋のドアをあけてまたもや呆然とする。ベッドを置いた部屋と水場……トイレットとシャ
ワールーム……しかない。

「これで、全部？」

「これで全部です」

「冷蔵庫とか、ないの？」

「ありません」

「あ、あの一、わたし、自己紹介を」

「名前だけでいいよ。ソフィア、だっけ」

「あした……」

「うん？」

「あした、アパルトマンの管理人さんのところへ行って、いっしょに部屋へ入ってもらおうと思うの。そ
れから……荷物を、持ち出して……」

「引き払う？」

「ええ。同居人の子には伝言を。——彼女、帰ってこないような、気がするの」

「あんまり思いつめるなよ。今夜のうちに帰ってくるかもしれないだろ？ あ、そうだ、シャワー、使
わないで」

「——え？」

「こっちのベッドルームまで浸水するんだよ。床で眠れなくなる」

07.

目が覚めるともう日が高かった。というより、昼に近く、今日の授業は諦めるよりなかった。部屋
にコウイチはいなかった。

おしゃれなワンピースのまま寝るのは窮屈だろ、ということで、昨夜はコウイチがパジャマを貸し
てくれた。不在のうちに着替えなくちゃならない。

着替えてパジャマを畳んでいるとコウイチが戻って来た。新聞を買いに行っていたという。

手渡された新聞をちらりとめくると、『セーヌ川に身元不明の女性の水死体』などという縁起でも
ない記事。

「よく眠れたかい。さて、外でなにか食べよう。カフェオレなんか、欲しいだろ？」

迷惑じゃあないか、とソフィアは心配していた。

「迷惑？ べつに」

「観光の予定は？」

「ああ、そういう旅じゃないから」

自分のことになるとコウイチは言葉少なだった。ソフィアも同じではあるけれども。

昨日の河畔の屋台でガレットを買う。ソフィアは鶏とほうれん草、コウイチはジャガイモとソーセージ。

「それ一度食べてみたかったの。あとで半分こしない？」「いいよ」

セーヌ河を眺めながらの昼食。

「アパートマン、いっしょに行ってやる」

「——ほんとに！？」

「部屋引き払ったあと、どうするの？」

「————」

「考えてなかったな」

-女の子が銀行の前でへたり込んでるのはちょっと...-

08.

アパートマン一階の管理人室を訪問すると、老婦人が戸口に現れた。そして言った。「お友達のところへ来たの？ それとも.....入居したいの？」

「そうじゃありません。わたし、二週間前から三階に部屋をお借りしてます。ソフィアといいます。同居人はマリアンナ——」

「はあ？ なにか、お間違えじゃない？ ここの三階は二部屋とも三ヶ月前から埋まってますけど。貴女には見覚えがないんだけど？」

「ですから——わたしたち二週間前からこちらに——」

老婦人は困った顔で首を横に振った。「どこか別のアパートマンと間違えてるのね？」

「そんなことはありません！ ここの番地で、向かいに雑貨屋さんがあって——」

「ソフィアさんとマリアンナさん？　そういうお名前の人と契約した覚えはないのよ、ごめんなさいね」

老婦人はドアノブを引っ張って戸を閉めてしまった。ぱたん、と。

「そんな！！　待ってください！！」

あわててどんどんとこぶしで戸をたたく。戸が少し開き、迷惑そうな声があった。「だから。お間違いでしょ。騒々しくすると警察呼びますよ」

「警察って——わたしはただ——」

ソフィアと管理人婦人とのやり取りを聞きながらコウイチは外で建物を見上げていた。「ソフィア、見て」

言われてコウイチが見ているものを見上げる。三階の部屋の窓の外に、花の鉢植えが並んでいて白い花がこぼれんばかりに咲いている。昨日の夕方見た時はそんなものはなかった。

「どういうこと——」

09.

「部屋にはなにが置いてあったんだい？　なにか大事なもののとかは？」

「洋服と、学校の教本くらいよ。お財布はいつもバッグに入れて持ち歩いてる。……あ」

「なんだい？」

「エディからの手紙——」

「彼氏？」

「ううん。エディは甥よ。十一歳なの。ちょっと生意気で、とってもかわいいの」

「ふうん……よし」

「なあに？」

「音楽学校へ通ってるって言ったね。そこへ行ってみよう」

「で、でも」

ソフィアはアパートマンを振り返った。昨日まで住んでいた部屋なのに、どうしてもう誰かほかの人が？ 冷蔵庫にあったたまごはどうなったの？

「たぶん」とコウイチは呟いた。「なかったことになってるよ」

音楽学校でも、アパートマンでの扱いと同じだった。ソフィアもマリアンナも在籍した形跡がないというのだ。顔見知りの生徒たちも、素知らぬ顔で通り過ぎていく。

「どうして！？ たった二週間だけど昨日まで通ってたのよ！！」

悪夢だ、とソフィアは思った。

10.

「きみ、うちはどこ？ 国内？」

「国内じゃないわ。ポルタアウレアというところ。え、うちへ帰れというの！？」

「パリに暮らす場所も学校もないんだから、実家へ帰るしかないだろ？ それとも家出してきて帰れないとか？」

「そんなんじゃないわよ！」

そこで、はたと思い至ったことがあった。

「どこへ行くんだ？」

「銀行——」

はたして、銀行には口座がなかった。お財布には"少額紙幣が一枚と小銭"しかない.....つまり手持ちは"千百六十七円"なのであった。これじゃあ、うちへ帰るところじゃない.....

八方ふさがりという言葉が頭のなかをぐるぐる回っている。なんなの？ なにがどうなってるの？ わたしはだれ？ ここはどこ？

だれか、助けて――

と、誰かが肘をつかんできた。思わず、「きゃあ！」と悲鳴が口から飛び出す。

「いや、女の子が街中の銀行の前でへたり込んでるのはちょっとね。絵にならない。とにかくどこかで落ち着いて、それから――」

11.

着の身着のままパリの街へ放り出された哀れな少女。それがわたし。ソフィアはそう自嘲する。バッグの中から貴重品入れを取り出す。銀行のATMカード、音楽学校の学生証、パスポート。ATMカードは銀行口座がないらしいので使用不可、学生証は学校に在籍記録がないので無効、パスポートは――まさかこれも！？

「あり得る」無情にもコウイチはそう言い、ソフィアは返す言葉もない。

わたしはだれ？

母国とを繋いでいたエディからの手紙も、もはやひとつも手元にない。おそらく今南フランスにいるのだらうディミトリエも、次の週末に会いましょうとか言ってきたくせに、昨夜車でアパルトマンの近くをうろうろしていた。いや、あれはぜったいディミトリエだ。怪しすぎて頼ろうという気にもなれない。

同居人マリアンナは無責任で当てにならないし、そもそも行方がわからない。

「ないないない！ なんにもないわ！！」

「まあ落ち着きなよ」

「落ち着いてるわよ！！」

「まあまあ。ところで、きみのこと、教えてくれない？ お父さんは？」

「父は.....十年前に亡くなったわ。兄が私の保護者よ。アランデルというの。職業？ ポルタアウレア大公国の大公」

「もしも……その話が本当なら……」

「わたしはポルタアウレア大公国の公女。甥のエディは兄の子で、皇太子」

コウイチは微妙な表情をして、そろそろと身を引こうとした。ソフィアを目線を受けて微妙な表情がもっと微妙になった。

-きみが知らない事情は山ほどあるだろうさ-

12.

ポルタアウレアはおかしな国だ。地理的にはギリシアとイタリアの間にあり、地政学的にひじょうに微妙な土地なのだが、よその国に支配されたという過去がない。なぜかという、この地に手を出すと、己に災いが降りかかるからである。ひそかに『呪われた土地』、とささやかれ、東ローマ帝国も十字軍もこの地を避(よ)けて通り、関わり合いを避(さ)けていた。

「その話は知ってるわ」と、ソフィアは言う。「で、なにか問題でも？ よそから支配されたこともなければしたこともない。ポルタアウレアはいたって平和な国だよ。外国の人と婚姻関係を結ぶこともあるけど、それはむしろ相手の事情を安定させるためね」

「ポルタアウレア人はアラブ人でもないしギリシア人でもない、トルコ人でもロシア人でもない。淡褐色の肌の色や均整のとれた体つき、独特の美しい容貌。ポルタアウレア人といふ言いがたい。太古に失われた高貴な一族の末裔といわれてるわ」

「なるほどね」

コウイチはソフィアを眺めてうなずき、興味深げに耳を傾けている。

「それで、今の元首、大公閣下はきみの父上だっけ？」

「兄上ですってば。父は十年前に亡くなってる。大公家の血統の人間は兄とわたし、それと兄の子のエディ。それだけ」

コウイチは、う～ん、とうなった。「だれかがきみを、家だか家族だかから、切り離そうとしている、ように思えるんだけど」

「わたしを？」

「うん」

「なぜ？」

「さあね。大公家なんて特殊な家柄だ。きみが知らない事情は山ほどあるだろうさ」

13.

（あっ）、と、ソフィアは押し殺した叫びをあげた。

「なに、どうした」

（——ディミトリエさま——）

公園の向こうから背の低い、小太りの男が歩いてくる。

（だれ？）

（いちおう、知り合い。昨日の夕方、アパートマンの近くで見かけたのよ。よおし……）

ソフィアの丸まっていた背中がぴんと伸び、目がみるみる燃え上がった。

（おい、なに考えてるんだ）

（試してみるわ、彼はわたしのこと覚えてるのかしら）

（え、おい、ちょっと——）

ソフィアはすっとベンチから立ち上がり、敢然と歩きだした。目はじっとディミトリエを睨んでいる。歩いてくる男の正面でぴたりと立ち止まり、仁王立ちで男を待つ。

男は鼻歌を歌いながら歩いていたが、正面の少女に気づいて、「うわああああ」と悲鳴をあげてとびすさった。

両手を腰にあてたソフィアは、相手を睨んだまま「ごきげんよう」と言った。とても「ごきげんよう」な態度にはみえない。

「え、え～～と、どちらさまでしたっけ??」

「あなたがよくご存知の者ですわ。あなた、いまわたしを見て、びっくりなさらなかった？」

「は？ いや、なさりませんよ、いきなり目の前に現れたのでびっくりしただけです。なんですか、ボクになにかご用ですか？」

14.

コウイチはソフィアに走り寄って腕をつかんだ。「ごめんごめん、待たせたね、さあ行こう」

「な、なにをするの、わたしはまだ話が——」

小ぶりで小柄な男は「なんだい、しつれいだな」とかなんとかぶつぶつ言いながら行ってしまった。

コウイチはその姿が見えなくなりそうなくらい公園の奥までソフィアを引っ張っていき、おもむろに言った。

（さあ、跡をつけよう）

（.....）

（きみがさいしょに声をかけたときの反応を見たかい？ あれ、かくじつにきみだと認識してたよ）

「そうかもしれない、そうじゃないかもしれない」

「え？」

「なんだかいつものディミトリエさまと違うわ。ほんとに違う人かもしれない」

"ディミトリエ"は小柄なので、人混みのなかですぐに見失ってしまうのが難点であった。

「彼はきみの国の人？」

「そうよ」

「きみ、ポルタアウレア人は淡褐色の肌の色で均整のとれた体つきをしてて、独特の美しい容貌をしてるって、言わなかった？」

「.....言ったわ」

ふたりは黙って"ディミトリエ"の跡をつけた。彼が行きついた先は、美術館だった。

15.

ケ・ブランリー・ジャック・シラク美術館。

アフリカ、アジア、オセアニア、アメリカ、4大陸の、宗教関連の儀式などに使用していた像や仮面が展示されている。

古い仮面や像、楽器らしきものが林立する、不思議な空間が続く。

コウイチは(エキゾチックだな.....)と感想をつぶやき、ソフィアもうなずいた。

かなりの数の見学者がいて、さまざまな言語で館内のざわめきは混沌としている。それでも"ディミトリエ"の背後からついていくと、彼が独り言をつぶやいているのがわかり、コウイチとソフィアは顔を見合わせて聞き耳をたてた

(.....ドジを踏んだもんだ)

(ちょっと暗かったもんだからね。間違えちゃったんだよ)

(間違った方の子を、どうした)

(ほら、要らないものは、言われた通りに)

(.....頻繁にやっちゃあいかんよ。この世界と、整合性がつかなくなる恐れがある)

(整合性だなんて、オーバーだなあ。ひとりふたりいなくなったって、誰も気がつかないよ)

(.....そんなことを考えるのはキミくらいだ。一国の公女がいなくなって、誰も気がつかない、で済むと思うのかね)

(でもほら、間違えたから。本物は逃がしちゃいけない。まだパリをうろうろしてる)

(見たのかね！？)

(声かけられた)

(——いつ)

(わりとついさっき)

(——つかまえろ！ こんなことしてる場合じゃない！！)

中南米のものらしいおどろおどろしく口を開けた巨大な仮面の前で、"ディミトリエ"は振り向いた。

16.

ふたりは走った。見学者をかきわけて。

(一国の公女がいなくなって、誰も気がつかない、で済むと思うのか)のあたりでふたり同時に踵を返していた。"ディミトリエ"はなにか恐ろしいことをつぶやいていたのだ。

「どうしよう、どうしよう、どうしたらいいの!？」

「メトロへ! 遠回りして! つけられるとまずいぞ!!」

「わたしお金持っていないのよ? 一文無しよ?」

「ごちゃごちゃ言うな!! 立て替えてやる! あとで返してくれ!」

乗り継いで遠回りしようにも、パリの街にもメトロにもまったく疎いソフィアにはわけのわからない話だった。昨夜は三十分でついたコウイチの安ホテルに二時間かかってたどり着いたときは、心臓はやぶれんばかり、脚は棒のよう、ふたりは呼吸も荒く同時に仰向けにベッドに倒れ込んだ。

-ディミトリエがこっち見てる-

17.

「あのディミトリエというのはどういう男?」

「大公家の遠縁。どういう関係なのかよく知らない」

「きみのいいなずけ?」

「なにそれ。ぜんぜんちがうわ。まあ、結婚相手の候補はたくさんいるけど、みんな、節度を守ってらっしゃるわ。ディミトリエさまはひときわアプローチがきょうれつな方よ。はっきり言って、わたしのタイプじゃない。エディも同じように感じてた」

「十一歳の子がね」

「わたしたち……感受性が似てるの。……歳は……関係……な……」

しゃべっているうちにとろとろと眠気がさしてきた。コウイチはがばっと起き上がり、しどけなく口を半開きにして眠っているソフィアを見おろす。

靴を脱がして……いかにもパリジェンヌなかれんなバレエシューズはCHANELで、彼は思わず目を剥いた……脚をベッドに寄せ布団をかけてやる。

生地も仕立てもよさそうな服は、あちこち捲ってみないことにはわからないけれど、

(たぶん、オーダーメイドだ。靴だけでも売ればいい値がつくだろうに。ぜんぜん一文無しじゃないじゃないか)

独り言ちて、目でソフィアのバッグを探し、手にとって開け、物色し始めた。銀行のATMカード、音楽学校の学生証、パスポート、学生手帳……学生手帳! ぱらぱらとめくる手が止まる。あった! 目当てのものが!

ホテルの近くの道端に公衆電話BOXがあるのをチェックしておいた。コウイチはそこへ駆け込む。呼吸を整え、送話器をとり、コインを投入、メモしてきた数字を注意深くプッシュする。
——繋がった！ ——呼び出してる。五回、六回、七回。

《……もしもし？ ソフィア？》 子供の、男の子の声だ。

コウイチは胸をなでおろした。幽霊をこの世に繋ぎとめるのに成功した。あの娘の存在を、この、電話に出た子が証明してくれるはずだ。

「もしもし！ きみはエディだね！？」

《……あなたは？》

「ぼくはコウイチ。コウイチ・ヒー——」

言いかけて、心臓が凍りついた。電話なんかしてる場合じゃない。そろそろと送話器を戻す。電話BOXから歩道が見える。歩道を歩いてくる者がいる。小太りで小柄なシルエットの男。"ディミトリエ"だ。

18.

なんでこんなところに！ 市内でまいたはずだったのに！ どきどきどきどきと心臓が鳴る。ホテルはすぐそこ、ぼくがいらないことに気づいたソフィアがホテルから出てきたら——

しかし"ディミトリエ"は安ホテルなど眼中にないように素通りして、行ってしまった。ホッとするとやらないやら、そろそろと電話BOXを出て、なにげないふうを装ってホテルの部屋に戻る。ソフィアはまだ眠っていた。寝かせておいてやりたいけどそうもいってられない。

（ソフィア！ 起きて！）

彼女は不機嫌にうなりながら体を起こした。（なあに？）

（落ち着いて聴いてくれ。"ディミトリエ"が近くに来てるんだ）

（……えっ）

（今、外で見かけたんだ。きろきろしながら南のブロックの方へ歩いて行った。やつに間違いはない）

(.....)

(目は覚めたかい？ さあ、逃げるぞ)

コウイチの所持品、小さな旅行鞆ひとつを持って、夕刻、ふたりはホテルをチェックアウトした。

19.

古着屋なんてところに入ったことのないソフィアはもの珍しさにきょろきょろせずにいられない。こういう店で買い物したことないだろ、とずばり言われ、物色はコウイチに任せる。ちょっとくすんだグリーンのTシャツとデニムのパンツ。

「もうちょっと明るいグリーンがいい」とソフィアはごねたが、「明るい色って目立つけど？」と反論され、「それもそうね」とうなずく。

スケッチブックは部屋に置いてきてしまったし、せっかくコウイチが届けてくれた帽子はメトロのどこかで失くしてしまった。

30%offの値札のついた使い込み感たっぷりの帆布のショルダーバッグに、着ていたワンピースと貴重品の入ったバッグ、全財産をしまって斜め掛けするとりっぱに"ふつうの子"だ。さすがのCHANELはそのまま違和感はない。

「こんなに買ってもらっちゃって、いいの？」

「カードで払うからだいじょうぶだよ。あとで返して.....」

「返せないかもしれないわよ？」

「.....とにかく、なにか食べようぜ、毎日ガレットじゃ飽きただろ」

「うん.....パスタ食べたい。それとオムレツ」

「はいはい」

パスタとオムレツを注文し、ソフィアは初めてコウイチの顔を間近で見た。黒髪と薄茶色の瞳、きれいな肌をしている。ま、それはともかく、

「逃げるって、どこへ逃げるの？ ドイツ？」

「.....ドイツに当てはないな」

「パパか、ママがドイツなんでしょう？」

「母親がね。でも、同じ大陸の中で逃げ回っても意味ないと思うよ。ディミなんとか氏はイタリアの向こうから追っかけてきたんだろ？」

「そ——」

ソフィアは言いかけて固まった。目はコウイチの背後に釘付けになっている。

(どうしたの)

(ディミトリエが。こっち見てる。目が合っちゃった)

ひそひそ言いあっているうちに料理が運ばれてきた。ディミトリエがこっちを見てようが、今大事なのは空腹をなんとかすることだ。

ふたりはモノも言わずにポモドーロとカルボナーラを半分こし、さらにオムレツも半分こして夢中で口に運んだ。ディミトリエは待たせておけばいい。用があればなにか言ってくるだろう。

20.

ディミトリエはひとりではなかった。子分だか助手だか相棒だかを伴っていた。ソフィアが見たこともない顔で、額に縦スダレがかかっているような、陰気で、生命力というものをまるで感じない男だ。

(二手に分かれて追いかけてたのか)コウイチは苦笑いした。(尾行をまこうだなんて、慣れないこととはするもんじゃないな)

額にスダレ男がディミトリエの車を運転し、助手席に座ったディミトリエがルームミラー越しに後部座席の二人を見張っている。車はイタリア製の高そうなスポーツカーで運転席と助手席しかない。ツーシーターというかっこいい造り。後部座席は荷物置き場、後部座席からドアを開けて逃げようにも、ドアはない。ソフィアはいつの間にか荷物の扱いになってしまっていたのだった。

車は昼間訪れたケ・ブランリー・ジャック・シラク美術館で止まった。

ふたりは車から降ろされ、額にスダレ男に、言う通りに歩けと指図され、館内を歩き、昼間ディミトリエが独り言を言っていた中南米産のおどろおどろしい仮面の前で立ち止まった。人の身長ほどもある巨大な仮面の前で。

風が吹きぬけるような音を感じる。ふふ...ふふふ...ふふふふ.....

風じゃない、とコウイチは気がついた。誰かが笑っている。誰かの含み笑いだ。

ふふふふ、ふふふふふふ.....

「誰！」ソフィアは敢然と声を張った。「これはいったいなんの真似！？ わたしをどうするつもり！？」

-貴女は魔法にかかってしまったんです-

21.

「ポルタアウレア大公国のソフィア公女殿下、でしょ？」ふふふふふふ.....「貴女のことはよく存じてますよ、大公国に三人しかいない、大公家の血の持ち主、すなわち、財産継承者」

「.....その方は何者か！！」

「まあ、名乗るほどの者じゃあ、ありませんよ。たいした者じゃあ、ありません」

「たいした者かどうかを決めるのはその方ではない。わたしだ。名を名乗れ」

「.....ベネトナシュ」

「ベネトナシュ？ どの、何者か」

「明かしたところで貴女にはおわかりにならないでしょう。端的に言って、常軌を逸した場所、常軌を逸した者。ああ、ワタシは貴女に質問攻めに遭いにきたんじゃないんですよ、貴女は質問を受ける側にある、ということを、お忘れなく」

「.....」

「貴女は大公家の財産を継承する立場にある。それは間違いないね、うん。そこで質問です。貴女が継ぐ財産とはなにか」

「知らぬ。なんとなれば、わたしは未だ未成年であるから」

「う～ん、そうらしいね、未成年の貴女や貴女の甥っ子は財産の中身を知らないんだ。うんうん。知らないんじゃないかな。貴女の継承者としての権利を、いただきたいのですよ」

「なんですって……」

「そこにいるディミトリエくんと結婚すればいいんです」

「……意味がわからない！」

「結婚してしまえば貴女の権利はディミトリエくんのものだから」

ソフィアはあからさまに嫌な顔をして、ディミトリエに目をやった。

22.

「今、貴女はとんでもない苦境にいらっしゃる。公女殿下。行く所も帰る所もなく、お金もない。人の記憶にも残っていない。存在自体が消されかかっている。そうでしょ？」

「——その方の仕業か」

ベネトナシュは肩をすくめて笑い、答えない。姿は見えないのに、雰囲気だけがそこにある。肩をすくめている様子がありありと見える。

「ふふふふふ……貴女は魔法にかかってしまったんです。貴女だけが魔法の世界にいる。でも——元の世界に戻る方法がある。そう、ワタシの言う通りにすればいいのです」

「——なにが欲しいのか」

「黄金」

「金鉱山？ それは大公家のものじゃなくて国のものよ。ディミトリエ家が管理する仕事をしているはず……」

ベネトナシュは人差し指を振って、ちっちちちつ、と舌を鳴らした。

「ディミトリエ家が知らない黄金を、大公家が独占している。ディミトリエ家が知っているのと比較にならない、莫大な量さ」

「大公家が独占してるんだ」、とベネトナシュは繰り返した。

「————」

「国民は誰も知らない。って、犯罪だよ、これは。公女さま？ 国民を騙してるんだ。大公は大ウソつき。息子も——」

「兄と甥を侮辱するのは許さない！」

「侮辱なんてしてませんで。ほんとのことを言ってるだけですって。それとも、ほんとのことを知りたくないくらい、貴女は世間知らずなのかな？」

くすくす、くすくす……

「いやいや公女さま、国民が騙されていたと知ったら、どうなると思います？ 暴動が起きるんじゃない？ 大公家一家は玉座から引きずりおろされ、よくて監禁、それとも……」

まったくの思いつきだったが、「ディミトリエさま」ソフィアはしゃべっているベネトナシュをいきなり遮った。

「マリアンナをどうしました？ わたしと同居していた子です。行方がわからないんです。彼女もわたしと同じように魔法にかかってしまったのでしょうか？」

ディミトリエは、さああと青ざめた。ソフィアの眼差しは「知らないとは言わせない」と言っていた。

すると、横からベネトナシュが口を出してきた。「貴女と間違えられた子だね」

「わたしと間違えた。マリアンナは間違われて、さらわれたのね！？」

「さらって、どうしたの！？」

「剥いてみたところで、貴女じゃないと気がついたんだよね。そうなったらもう、行きがけの駄賃さ。ま、未婚の清いお嬢さんが知らなくてもいいことだね」

みるみるソフィアの眉が吊り上がった。マリアンナはわたしの替わりに——？

「彼女は今どこ——」

「セーヌ川を、泳いでる」

23.

世界が崩れる音が聞こえる。悪夢に囚われ、もう二度と元の世界に戻れない。

ポルタアウレアで金が採れることは周知の事実。けれど、もっともっと莫大な量が採れる、そのことを大公家が隠し、独占している？ そんなばかな。兄はそんなことができる人じゃない。

でも――

金(きん)というものは、どこを掘っても出てくるわけじゃない。鉱脈を管理しているディミトリエ家が、そんな莫大な埋蔵金を知らなかった、と？

ベネトナシュという得体の知れない男は、わたしをなんとかすれば、その金(きん)が手に入ると思っているらしい。

なんにしても！ あまりにも、ばかげている！ ディミトリエ本人も、元々理解し難くて、できればつきあいたくない人間だったが、こんな幽霊みたいな男と手を組んでいたとは！

ところで、この小柄で小太りの男は、ディミトリエ家の三男坊である。長男と次男は仲良しで、それはよくできた人たちで、見栄えもよく、それぞれ所帯をもってそれぞれの事業に携わっている。三男坊だけが異質なくらい小柄で小太りで定職はなく、遊び好きで、当主である親に甘やかされて金遣いが荒い。つまり、国の金鉱脈管理権は未だ当主が握っていて、誰が跡を継ぐか決まっていないのだった。実力派の長男と次男か、当主お気に入りの異色の三男か。

ああ、とソフィアは胸落ちする思いだ。三男はおそらく、分が悪いのだ。自他ともに認める優秀なのが、上に二人もいるのだから。

ちなみに、三男を"ディミトリエ"と呼ぶには訳がある。彼のファーストネームはエドアルドといって、愛称が"エディ"。

……そういうわけで大公家の跡取りプリンス・エディが嫌がるのだった。優秀な兄たちには不本意だろうが、十把ひとからげに"ディミトリエ"と、人は呼ぶ。

それはともかく、大公家の娘と縁を結ぶことでふたりの兄たちより有利に立とうということなのだろう。

(不潔だわ！)ソフィアはきりきりとかわいらしく歯ぎしりした。(フケツすぎるわ、そういう思惑でわたしに言い寄ってきたなんて！　そのうえマリアンナがわたしの身代わりに——！)

歯ぎしりしながらはらはらと涙をあふれさせるソフィアである。

24.

「ちょっと、いいですか？」冷めた口を挟んできたのはコウイチである。

ベネトナシュ(の雰囲気)がさも嫌そうに応じる。「なんだねキミは」

「ただの通りすがりですよ。ベネトナシュさんも、ディミトリエさんも、もしやお忘れではないかと思うんですが」

ベネトナシュさんとディミトリエさんが同時に尋ねる。「なにを？」と。

「ポルタアウレア大公国の歴史をです。かの国は、外部から支配されたことが史上、一度もない」

「……………」

「それは支配しようとした側に、災いがふりかかるからです。ぼくのような通りすがりの人間でも知っている」

「……………」

「ここまで言えば、ぼくの言わんとすること、わかっていただけますね」

「わからん」「わかりません」

がっくりとコウイチの肩が落ちる。

「だから～、外部から支配されたことがないのは、大公家も同じこと。すなわち、大公家を支配しようとするれば、あなたがたに災いがふりかかりますよ」

「え、いや、支配しようだなんて」「災いが——」

「あなた方のしていることは、そういうことです。どうしてそれがわからないんでしょう」

ベネトナシュ(の気配)とディミトリエは、通りすがりの端役にそう断じられて呆然となった。

「し、支配しようだなんて滅相もない……」、とベネトナシュ。

「まったく。乗っ取るつもりだったですよ、ねえ」、とディミトリエはベネトナシュに同意を求める。

「金(きん)を手に入れ、そのうえ公国を乗っ取るつもりだった、というの!？」

「のののの乗っ取るだなんて滅相もない」

「まったく。こっそり支配するつもりだったですよ、ねえ」

25.

「もう、いい。行こう。ソフィア」

コウイチはきっぱりと言い、ソフィアの手をとって歩きだしていた。ベネトナシュの気配も、ベネトナシュに依存するディミトリエもその場に残して。

「行こうって、どこへ!？ 彼らを放っておいていいの!？」

「彼らは自分のやってることの意味がわかっていない。きみはこれ以上彼らに関わってはいけない。

あのおどろおどろしい仮面を見ていて思い出したんだが、彼らは事実を書き換え、人の記憶を書き換えることができるようだ。無効で使えなくなってるけど、ATMカードや学生証、過去にそれらを作った時点がある。時間が経つと書き換えられたことが確定してしまうんだ。

おそらく時間が経てば経つほど、書き換え後の事実は確定される。逆に、偽造のカドで犯罪者にされてしまうことになりかねない。そういう魔術があると何かで読んだことがある」

「魔術——」

「きみのパスポート、時間が経てば、無効になるんじゃないか？」

ソフィアはあぐりと口を開けた。

「わたし、ポルタアウレア人じゃなくなっちゃうってこと！？」

「that's right. だから、今のうちに、まだ有効なうちに、フランスを出よう」

「——どこへ？」

「オーストラリアへ。きみをぼくの家族だということにすれば、入国できる」

「コウイチ——」

「ああ、便宜上、だぜ？ あとのことはそれから考えればいい。パスポートはまだ使えるかもしれない。有効なうちに、とにかく飛行機に乗るんだ」

26.

国際空港の夜景を眼下に見ながら、ソフィアはぼんやりしている。

「こんなふうにパリを離れなきゃならないなんて……でも、飛行機に乗れて、よかった。コウイチのおかげよ」

「何はともあれ、だな」

「ねえ、彼らを放っておいて大丈夫なの？ 跡を追って来ない？」

「たぶん。ディミトリエはあの美術館からそう離れられないはずだ」

「どういうこと？」

「彼はあの幽霊みたいな"やつ"にすっかり依存してるようだった。"やつ"の指示がなければ動けないんだろう。そして"やつ"は、あの場を動けない」

「？」

「でかい仮面、あの仮面は、なにかの扉（ポータル）だ。おそらく別の世界と今現在を結ぶ通路だ」

「あの幽霊みたいなのは別の世界の生き物——？」

「うん、だから自分のかわりに動く人間が必要だったのさ。それがディミトリエ。そしてさらにきみのくにへ手を伸ばすために、きみが必要だったんだ」

「彼らはゴールドのことをいろいろ言ってたけど、本当なのかしら。兄上や、あの国は大丈夫なのかしら」

「だいじょうぶだよ、きみの甥っ子と話したけど、あの子はきみによく似てるから」

「——え！？ エディと！？ いつ！？ どうやって！？」

「えーと、今日の、夕方だったかな、きみがぐっすり眠ってる間に。学生手帳から実家の番号を拝借しました」

「——油断も隙もない人ね——」

「話したといっても、名前を聞かれたから答えただけさ」

「それだけ？ それだけでわたしに似てると思ったの？」

「うん」

「……………」

「わかったよ。勝手なことして。でも、きみの国と家族にちょっかいだして、どんな目に遭ってもしらないよっと、釘刺しといたから」

「ほんと、勝手な人よね。わたしをオーストラリア行きの飛行機に寄せちゃうし。ねえ、向こうへ着いたら、わたしはどうすればいいの？」

「まあ、ゆっくり考えるさ」

「わたし、食事のしたくくらいできるわ。貧乏な生活だって平気。牛の世話や野菜作るのだって、頑張る。だから——」

物語はここで終わっている。

番外編・「Fairy tale」

あとがき

『Salamander in〜』の『9かける3番目の王国』みたいに語ろうと思っていましたが、そうはなりませんでした。現代ものだからか。すっかりミネムラ節に。
サブタイトル『Fairy tale』は、おとぎ話。おとぎ話じゃなくてミステリーorサスペンス風になってしまった。

まあ、アランデル大公やエドミール殿下は、ソフィアは外国人旅行者にたぶらかされて出奔したと思ってるわけで、あとになって外国人旅行者とは桧山家の人間だとわかるわけですが、それでも、ソフィアとコウイチはたぶらかされ、たぶらかした関係だと思われていたのです。
ところが……、というのがこの『Fairy tale』。

単に計算のしやすさから、桧山健は西暦2000年生まれということになってまして、ソフィアとコウイチが出会ったのは90年代、今よりもずっとアナログな時代です。

2025年10月11日 記

奥付

リ・コンストラクション

番外編 Fairy tale

2025年10月15日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

[imagescreate](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社